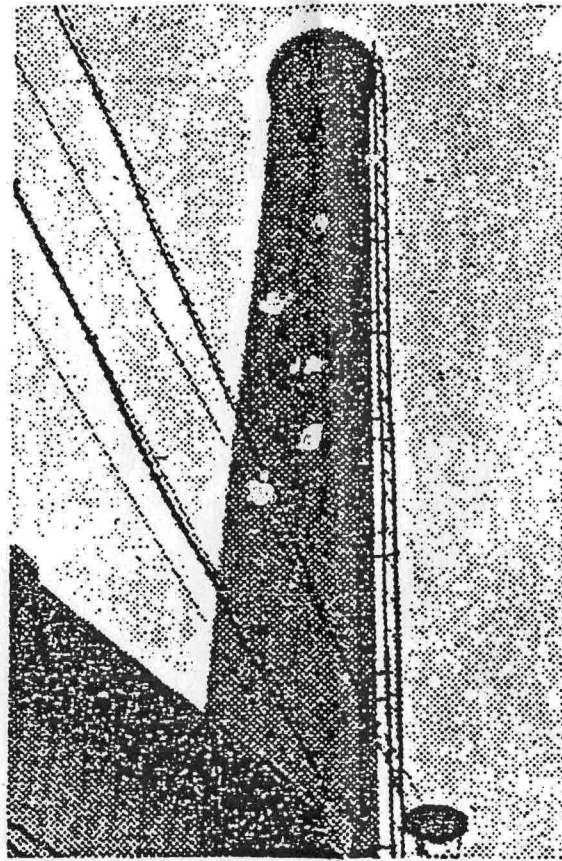


# 乙訓にも空襲があった

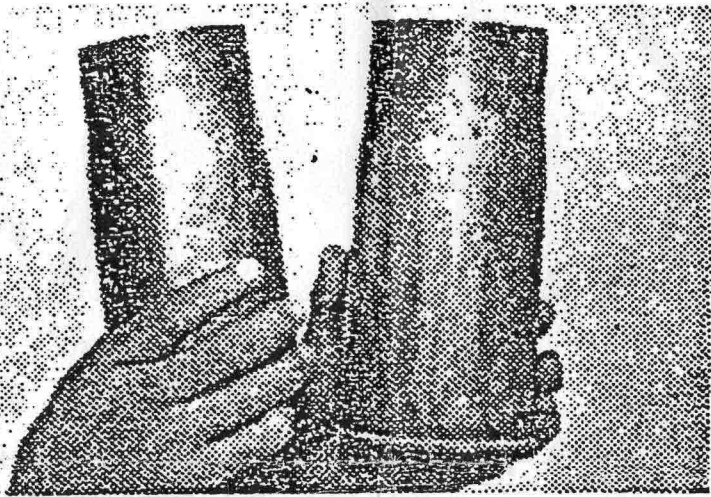
## 地元の記録する会会員が被害者つぎとめ

## 動員学徒の命奪う

記録にあらわれない戦災を、戦争を知らない世代に伝え、平和に役立てようとの趣旨で発足した「京都空襲を記録する会」の乙訓在住の1会員が、草の根を分けて空襲の「つめ跡」をたどっていったところ、乙訓でも戦時中に死者を出すような空襲被害のあったことがわかった。京都にも、そして乙訓にも空襲はあった。終戦28年、平和なこのベッドタウンにも「戦後」はまだ消えていない。きょう15日は「終戦の日」…。



日本輸送機工場の煙突に28年たった今日も残る銃こん



国鉄神足駅周辺で見つかった高射砲の薬きょう

第二次世界大戦の空襲の被害は、戦後永く明らかにならず「アメリカの良心が京都の古文化財を守った」ともいわれてきた。その後、全国各地の戦災都市で、市民団体による空襲の実態調査が進み、京都でも京都宗教学平和協議会(会長・大西良慶清水寺貫主)が四十六年六月から一年がかりで調べた。その結果、京都市内など多くの被害者を出している悲劇の実態が浮かびあがってきた。こうした捜査の中で、先月一日「京都空襲を記録する会」が生まれた。九月末までに京都空襲の被害の中心を府総合資料館に提出する。乙訓の空襲を調べているのは同会理事で長岡京市神足新町の溝口泰吉(とく)と、京都市立緑林校教諭。発会の日、会場に買寄せられた「グラマン」の機銃で乙訓の工場全体が撃たれ、工場1人が死「…」の一枚のはがきに溝口泰吉の目がとまった。

風のふたつを頼りに人づいて、足を踏んで溝口泰吉が調べた乙訓の空襲の場所は、乙訓の長岡京市に空襲があったのは、昭和二十年七月十九日朝十時半ごろ。快晴の空に米軍の戦闘機グラマンが天王山方面から二機飛来して来た。突如、急降下したかと思いつく、国鉄神足の日本輸送機と松風陶磁製造の工場周辺を飛行して日本輸送機の煙突のまわりを旋回し、数十発を銃撃して来た。日本輸送機で勤務中だった学徒動員の女性一人が死した。この人の名も、年もわからなかったが、同市今里に住む故人の姉をよつと捜して、岡田ヒロキ(当時十六歳)とわかった。工場の屋根を貫いたタマが機械にあたってはね、左胸から右胸に貫通した。血がしたたるタムカをトラップと乗せ目撃。応急手当のため、府立病院で午後二時半、息をひき止めた。「死ぬのさやう」のうちは姉を残して…。

警察解除のしらせで防犯していた手をかけた松風陶磁の男子工員も親指のタマを受けた。ほかにもたぐさのけが人が乙訓で出た、と乙訓。神足周辺の民家も銃撃を浴びた。タムスに三発のタマがあつた家、タマがくまも残っている家、当時四歳の男児が首たもとに傷を受けた家…。ある民家は、タムスにけがらけた当時を憶ふ

### 工場に

### 今も銃こんの跡

(板倉 宏)